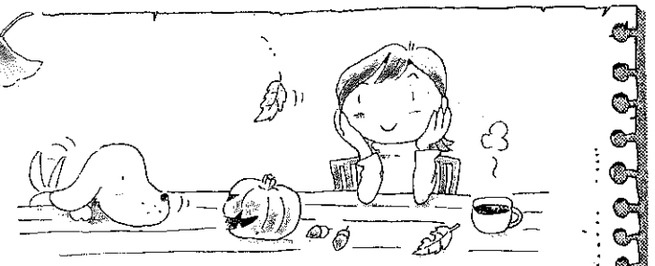
10月の

ほけんだより



神無月

2017（平成29）年 10月6日(金)
明石市立二見中学校
保健室
No. 6

朝夕が肌寒くなり、すっかり秋らしくなってきました。日中との温度差に体が対応できずに体調を崩したり風邪を引いている生徒もちらほら見かけます。また夏に比べると日没時刻が早まってきました。夕方のことを黄昏（たそがれ）といいます。「誰そ彼」が語源で誰かいるのか見えにくい状態を示しています。視界の悪い黄昏時は特に交通ルールをしっかり守って安全な生活を心がけましょう

十月の健康の言葉

理詰めで物事を考えることによって、新しい発見をしたことは、私には一度もない。

アルベルト・アインシュタイン（ドイツの理論物理学者。ノーベル物理学賞受賞者）

カズオ・イシグロ

石黒 一雄

ノーベル賞受賞者

受賞年：2017年

受賞部門：ノーベル文学賞

受賞理由：壮大な感情の力を持った小説を通し、世界と結びついているという、我々の幻想的感覚に隠された深淵を暴いた

誕生	1954年11月8日（62歳） ● 日本 長崎県長崎市
職業	小説家
言語	英語
国籍	（● 日本）→ イギリス

生い立ち

長崎県長崎市で海洋学者の父、鎮雄と母静子の間に生れる。幼少期は長崎市内の幼稚園に通っていた。1960年5歳の時に父の仕事の関係で一家で移住し、イギリスの現地校に通うことになる。大学院時代から小説を書きはじめ、卒業後は一時はミュージシャンを目指すも、文学者に転じて現在に至る。

祝福してくれた日本のファンに「心から感謝したい」
ノーベル文学賞受賞のカズオ・イシグロ氏

「私の一部は、いつも日本人。多くのファン、読者に心から感謝したい」

「両親は日本人で家庭では日本語を話しており、私は自分の中の日本、日本人の部分を常に感じてきた。私の世界観には日本が影響している。私の芸術的なアプローチの大部分は日本的なもので、それは初期の作品で描いている

代表作「日の名残り」「女たちの遠い夏」1982
「浮世の画家」1986

産経新聞 10/6(金) 10:58配信

神戸新聞 10/6(金)

iPS創薬 治験に着手

骨の難病 明石の山本さん

京大、世界初

日本に約80人の患者（8歳でFOPと診断）

iPS細胞を使った創薬で治験に臨む山本育海さん（中央）と母親の智子さん（右）＝5日午後、京都大病院（代表撮影・中西大二）

難病（FOP）」と闘う山本育海さん（19）＝明石市＝に対し、1例目の患者として治験に着手したと明らかにした。

山本さんは2010年、自らの体細胞を京大iPS細胞研究所（所長・山中伸弥教授）に提供。病気のメカニズム解明や治療薬の開発が進められてきた。山本さんは「患者は僕だけじゃない。患者の皆さんと一緒に頑張っていきたい」と力強く語った。

治験薬は別の難病の薬として販売されている内服薬「ラパマイシン（商品名ラパリムス）」。京大の戸口田淳也教授らの研究チームが、患者の細胞から作ったiPS細胞に約6800種の物質を加えて効果を分析した。同チームはこの薬に異常な骨の形成を抑える効果があることを突き止め、iPS細胞を使った創薬の世界初の治験に至った。

治験には京都、東京、名古屋、九州の4大学病院が参加。6～59歳の患者計20人にそれぞれ1年間、ラパマイシンや偽薬を投与するなどして安全性と有効性を確かめる。

山本さんは小学生の時、iPS細胞を使った再生医療や創薬の可能性を知り、「僕の難病を治す薬を開発してほしい」と皮膚の細胞を同研究所に提供。この日、京大病院で体の状態を確かめる診察を受けた後、薬を受け取り、7年間待ち望んだ治験が始まった。

山本さんは「治験はまだまだ先だと思っていたので先生方に感謝しています」と笑顔。戸口田教授は「早ければ数年以内に実際の薬にできる可能性がある。着実に治験を進めたい」と話した。（山路 進、藤井伸哉）

★今年度 学校で行われる健診は全て終わりました。健診の結果病院受診が必要な生徒のみお知らせを渡しています。早めの受診をよろしくお願いします。（※脊柱そく湾検診二次結果は11月以降になる予定です）